

カドタ式土のう袋

土のう袋に「庭の土と米ぬかを混ぜて作ったタネ」と「生ごみ」を入れ、タネの中の微生物の作用でごみの有機成分を発酵分解し、堆肥化します。

物置や雨の当たらないベランダに置きますので、冬期でも使えます。また、土のう袋は繰り返し使えますので、コストもあまりかかりません。

使用方法

1 タネの作成

①土1リットル、米ぬか1～1.5リットル、水0.5リットル（又は土2リットル、米ぬか2～3リットル、水1リットル）を

②③軽く握って固まるくらいまで水を少しずつ入れて混ぜ合わせます。

④土のう袋に入れ、口をねじって

⑤すのこなどの下からも空気が通り、雨などの当たらない場所に置きます。夏は2～3日、冬はあまり寒くない所に4～5日放置します（冬の屋外では作れません）。

⑥タネの表面に白や黄色っぽいカビのようなものが発生したら出来上がりです。タネの塊をほぐして2日くらい乾燥させると使いやすくなります。



ワンポイント

①のカッコ内の分量で10回分、約5キログラムの生ごみを処理できます。タネは一度にたくさん作り、乾燥させておくと便利です。タネの中の微生物は休眠していて、生ごみと混ぜると生ごみの水分を吸収して発酵活動を始めます。併せて生ごみの余分な水分を減らす利点もあります。

2 生ごみの投入

①土のう袋の底にタネを入れます。

②生ごみを入れて、生ごみが隠れるくらいタネを振りかけます。

③袋の口を閉じて手前にねじりながら軽く床に叩きつけて中を混ぜ④口を下にして、下からも空気が通るように置き、2～3日発酵させます。発酵が進むまで次の生ごみは入れないでください。

②～④を繰り返します。



ワンポイント

1回の生ごみ量は500グラムくらいです。毎日出る場合や多量に出る場合は、土のう袋を2～3枚用意して順番に入れましょう。

3 水分の調整（発酵促進と悪臭防止）

水分が多いと嫌気性菌が増え、悪臭が発生しやすくなります。生ごみを水切りするほか乾燥したタネを使って水分過多にならないようにしてください。また、魚や肉類は悪臭を発生しやすいので、入れずに捨てるか冷凍などにしておくほうが良いでしょう。

ワンポイント

冷凍などにしておいた魚や肉類は、土に埋めるときに底に入れると、それも堆肥になります。

4 堆肥化

袋がいっぱいになってきたら土を30cm程度掘り、中身を埋めてください。堆肥が熟成していれば、すぐに使っても構いません。また、臭いが強くなったり虫が発生したときは、すぐに土に埋めてください。1か月前後で熟成した堆肥となります。

ワンポイント

袋の中身は土に埋める代わりにコンポストに入れると、コンポストの土かけにもなりますので一石二鳥です。魚や肉類も先に入れると良いでしょう。

また、冬期はダンボール箱などで保温し、発酵を促進してください。段ボール箱の中にペットボトルを2本入れて、その上に土のう袋を置きましょう。